

## ヘブル人への手紙13章「良いわざへの勧め」

### 1A 純粋な愛 1-6

1B 兄弟への愛 1-3

2B 汚れの分離 4-6

### 2A 神の受け入れられる祭壇 7-16

1B 神のことばの教え 7-9

2B キリスト者の祭壇 10-16

1C 門の外 10-12

2C 来るべき都 13-14

3B 神の喜ばれるいけにえ 17-18

### 3A 整えのための祈り 17-25

1B 指導者への服従 17-19

2B 羊の大牧者 20-21

3B 勧めのことば 22-25

## 本文

ヘブル人への手紙 13 章、最後の章になります。今回は、信仰によって耐え忍ぶことを教え、神からの訓練だと思いなさいという勧めがありました。そして、シナイ山に近づいているのではなく、シオンの山にある喜びに近づいているのだという事も教えていました。そして 13 章は、数々の勧めになります。また、これまでのことの、まとめにもなっています。

### 1A 純粋な愛 1-6

#### 1B 兄弟への愛 1-3

<sup>1</sup> 兄弟愛をいつも持っていなさい。

兄弟愛への勧めです。ユダヤ人の信者たちは、激しい迫害と困難の中にありました。それで、信仰が冷えてしまい、後ずさりしてしまいました。その中で愛も冷えていったのです。自己保身になり、自分のことを求めていってしまいました。著者は、彼らが、かつて愛に満ちていたことを指摘していました。「6:10 神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」そして、「10:24 また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。」とも言っています。信仰が後ずさりしていて、それで他者のことを思いやることにも、後ずさりしていたのです。いつの間にかそうなっています、だから注意し合うのです。

ここで、著者が強調しているのは、「いつも」兄弟愛を持っていなさいということです。時が良くても、悪くても、その愛を保っていることです。それができるのは、どのようにしてでしょうか？10章で、著者が勧めたように、集まることを怠らないことです。肉の家族において、どれほど、一緒に食事をするを大事にされますね。家族愛を確認しているのです。同じように、主の御名によって集まり、礼拝を献げます。献げるだけでなく、互いに分かち合い、祈り合います。そして、共に食事をします。そのようにして、私たちは兄弟愛をいつも持っているのです。毎週日曜日の礼拝に集うことはもちろんのこと、礼拝が始まる前、終わった後のことが、愛の実践の場となるのです。

<sup>2</sup> 旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました。

私たちの間、兄弟の間で愛を示していることの次に、私たちは知らない人々にも親切にしていくべきというのが、ここでの教えです。旅人をもてなすことは、当時はかなり大事な部分を占めていました。ロトの時のことを考えていただくと分かるのですが、野宿することは、悪いことをする人たちがいるので、非常に危険でした。ですから、旅人を泊めることは非常に重要なことであるという習慣がありました。今でも、アラブ人の間では旅人をもてなす文化があり、全く見知らぬ人でも、三日間は、なぜ泊っているのかを尋ねないという習慣が、残っているそうです。

そして、教会が生まれてからは、キリスト者の間でも人々の出入りが多くありました。教会には牧者がいましたが、使徒や伝道者など、巡回している人々が多くいました。そういった人々を、もてなすことも大事だったのです。私たちの教会にも、ゲスト・スピーカーをお招きしますね。そういった方々におもてなしをすることは、主からの命令ですね。

「ある人たちは、知らずに御使いたちをもてなしました」とありますが、これは、アブラハムが三人の旅人をもてなしたときのことです。実は、一人は主の使いで、主ご自身でした。もう二人は、ソドムに行き、ソドムが滅ぼされることをロトに伝えました。御使いだったのです。ここで著者の言わんとしていることは、旅人が主ご自身から遣わされている人々かもしれないのだよ、ということなのです。そうした思いで、旅人を敬って、迎えなさいということです。

<sup>3</sup> 牢につながれている人々を、自分も牢にいる気持ちで思いやりなさい。また、自分も肉体を持っているのですから、虐げられている人々を思いやりなさい。

兄弟愛だけでなく、旅人をもてなし、それだけでなく、牢につながれている人々、また虐げられている人々を思いやります。そこまで、主に与えられた愛を広げるのです。そして、牢に入れられた人を思いやるのは、自分たちもその一味だと思われる危険があります。それでも、思いやるのです。彼らは、かつてはその危険を冒していました。「10:34 あなたがたは、牢につながれている

人々と苦しみをともにし、また、自分たちにはもつとすぐれた、いつまでも残る財産があることを知っていたので、自分の財産が奪われても、それを喜んで受け入れました。」

私たちに与えられたキリストの愛を、「自分も牢にいる気持ち」になることで、働かせるのです。また、虐げられている人であれば、「自分も肉体を持っているのですから」と言っています。わが身だと思うことです。私たちの教会では、祈り会で、キリスト者が生きるのが困難な地域の人々のために祈っています。北朝鮮や中国のために祈っています。それから、ウクライナの教会の人々のために祈ります。戦果の中にあるからです。

## 2B 汚れの分離 4-6

このようにして、愛と善行を促す勧めをしました。次は、汚れから離れる勧めです。

<sup>4</sup> 結婚がすべての人の間で尊ばれ、寝床が汚されることのないようにしなさい。神は、淫行を行う者と姦淫を行う者をさばかれるからです。

信仰から後ずさりすれば、自ずと、肉の欲に引き寄せられるようになります。「結婚がすべての人の間で尊ばれ」というのは、自分に妻がいるということが、すべての人に尊ばれるということです。つまり、私自身が他のすべての女性に対して、妻がいるのだから付き合うことはできないと、見せることです。すべての人が、自分には伴侶がいるということを知らせ、自分を守ります。

そして、寝床とありますが、これはもちろん、夫婦関係のことです。性的な関係は、夫婦の間のみで守られます。「創世 2:24 男は…、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」この一体は、神が唯一であるという時の、唯一と同じ言葉です。神の、三位一体のお姿を反映しているのです。もし、このことをもつとお知りになりたい方は、雅歌を読まれるとよいでしょう。私たちも、礼拝説教の中で、かつてしっかり学びました。ですから、汚されるようなことがあってはなりません。

そして、「淫行を行う者」とは、夫婦関係以外のすべての性的関係のことを指します。「姦淫を行う者」とは、伴侶のいる人と性的に通じることです。どちらにしても、神からの裁きがあります。これは、使徒たちの教えで一貫しています。「コロ 3:5-6 ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。これらのために、神の怒りが不従順の子らの上に下ります。」

<sup>5</sup> 金銭を愛する生活をせず、今持っているもので満足しなさい。主ご自身が「わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない」と言われたからです。<sup>6</sup> ですから、私たちは確信をもって言います。「主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるだろうか。」

信仰から離れていきそうになったら、すぐに金銭への愛の誘惑が出てきます。それは、迫害下であれば、なお一層でくる誘惑です。迫害によって、財産が奪われるなどの危険があります。信仰を表明しなければ、そんな危険がありません。今の言葉でいったら、負け組ではなく、勝ち組に入れるのです。しかし、その流れに自らを置くと、一気に、世の流れ、つまり、金銭がないと心が落ち着かないという欲に陥るのです。満足を得ようとしても、いつまでも得られない状態に陥ります。

ある教会で、一人の女性が困った顔をしていました。彼女がいなくなった後に、牧師さんが説明してくれました。お金がないという悩みを打ち明けていたそうです。けれども、牧師さんは知っているのです。そんなに収入が少ないわけではない家庭なのだそうです。ところが、私たちも知っている、礼拝にはしっかりと集い、いろいろな奉仕をしている家族がいます。その人たちの収入は、先の人たちより少ないです。けれども、献金もしています。決して食べる物に困っていないのです。前者は満足をしていないのに対して、後者はしているのです。

著者は、二つの約束を聖書から引用しています。一つは、決して見放さないという約束です。もう一つは、主が助けてくださるから、恐れないということです。金銭を愛する欲望に屈するのは、この二つに真理から離れてしまうからです。主は見放すことはありません。それを忘れると、必死にお金もうけをしようとします。恐れる必要はない、主が支えるから、という事を忘れても、恐れて、必死になってお金をもうけようとするのです。もちろん働くことは大事ですが、必要以上に求めません。

## **2A 神の受け入れられる祭壇 7-16**

### **1B 神のことばの教え 7-9**

<sup>7</sup>神のことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、覚えていなさい。彼らの生き方から生まれたものをよく見て、その信仰に倣いなさい。

13章では、指導者を覚えなさい、指導者に従いなさいという強い勧めが目立ちます。ここを、文脈を外して語られることが多いです。13章全体の流れ、そしてヘブル書全体の流れを見ながら、著者の勧めの意図を考えてみましょう。

指導者とありますが、これは「神のことばをあなたがたに話した」ということです。指導者に従う、というよりも、指導者が語っている神のことばに従う、ということです。そして、指導者に従うのではなく、本質的に、神ご自身に、キリストご自身に従うということです。指導者はあくまでも、神とキリストにみなさんが従うように、導く人々なのです。

そして、9節を見れば分かりますが、「恵みによって心を強くする」という、神の教えを語っているのです。そうではなく、ユダヤ教のしきたりの中で埋没していく人々が多く、神の恵みのことばを教えていた監督たちの教えから、離れていく人々がどんどん出て来ていたのです。それで、このよう

な勧めになっているのです。ここの箇所、また 17 節にある言葉を、牧師に権威付けをするために、従わせるために利用する者たちが、一部にいます。これは、全くの文脈を外した引用なのです。

背景を考えてみましょう。私は個人的に、パウロがこの手紙の著者だと感じるのですが、パウロやバルナバが、アンティオキアの教会で奉仕していた時に、ユダヤからの人々がやってきて、「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていました(使徒 15:1)。それで、二人と彼らが激しい対立となり、決着をつけるためにエルサレムで、使徒たちや長老たちと話し合うことになりました。そして、その場でパウロが、異邦人の中での神の恵みのわざを分かち合います。すると、パリサイ派で信者になった者が、異邦人にも割礼を受けさせて、律法を守るように命じるべきであるという人たちがいました。それで激しい議論になりましたが、ペテロが立ち上がり、コルネリオの一家が聖霊のバプテスマを受けたことを証しました。それから、エルサレムの教会の監督である、ヤコブが立ち上がりました。パウロ、ペテロの立場を支持します。そして、異邦人に対する重荷を負わせない文章を、異邦人主体の教会への手紙として書きました。

その中に、こう書いてあります。「使徒 15:24 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。」そう、指導者たちの指導から外れて、勝手に、ユダヤから来たものだと、エルサレムの教会を笠にして、ユダヤ主義を教えている偽教師たちがいたのです。初代のこれら、神のことばと、その恵みを教えていた指導者たちから、離れていったと考えられます。そこで、指導者を認めなさいという勧めがあるのでしょうか。ヤコブやペテロ、またヨハネは、パウロの異邦人に対する働きを認めましたが、おそらく、この手紙の著者であるパウロも、エルサレムの教会の指導者を認め、それに従うように促しているのだと思われます。

そこで、「彼らの生き方から生まれたものをよく見て、その信仰に倣いなさい。」と言っています。神のことばを教えている者たちが、その教えにかなった生き方をしていました。そのことによって、自分がいかにキリストに従えばよいのか、その指針、模範になります。パウロも、こう言ったことがあります。「 I コリ 11:1 私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」これは、キリストに倣いなさいと勧めているのです。キリストに倣う者であるように、というのが大事です。そこで、自分がキリストに倣う姿を見せているので、それと同じようにキリストに倣いなさい、ということです。キリストに指導者が倣っているところで、自分自身が倣うのです。

<sup>8</sup> イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。

ここで著者が、このことを言っている理由は何でしょうか？次に出てくる、異なった教えをしている者たちの背後にある考えが、変わっている、というもののなのです。まず、イエス・キリスト、昨日と比べて今日は変わっている、というものです。言い換えを変えれば、この方による仲介で新しい契約

が結ばれましたが、それは、ユダヤ人の律法からかけ離れて、別のものとしてやってきた、とすることです。つまり、旧約聖書とは連続していない、全く新しいものだとしてやってきた、というものです。キリスト教会の中に、なぜか旧約聖書は教えないで、新約聖書からばかり教えている傾向がありますね。あたかも、旧約にはイエスは関わらず、新約時代になって現れたかのように、人々にみなされていくように、なってしまいます。

これらのことは、主ご自身が否定されました。「マタ 5:17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。」恵みの福音を、信仰による義を語っていたパウロも、「ロマ 3:31 それでは、私たちは信仰によって律法を無効にすることになるのでしょうか。決してそんなことはありません。むしろ、律法を確立することになります。」そして、パウロは、カイサリアで被告人として弁明しています。「使 26:6 そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。」イエス・キリストは、このように昔からおられて、この時代に現れてくださったのだ、ということをご自身も、また使徒たちも教えていたのです。

そして、「今日も、とこしえに」とも、著者は言っています。いろいろな異なる教えが出てくる時に、必ず言われるのは、「今までは教えられていなかったが、今、新たに真実が示されたのだ」という、新たな教え、新たな示しを強調します。使徒たちが教えている、主イエス・キリストの福音が、あたかも足りなかったように伝えるのです。そして、この教えがあって初めて成就するのだというように、人々に教えるのです。ですから、私は、既存の教会のことを十把一絡げに全否定して、自分たちの教えを広める人々や、教会には、かなり警戒します。イエス・キリストは、どこにおいても、不完全な中でも、いつも変わらずに、ご自身を証しておられるのです。

カルバリーチャペルは、ジーザス・ムーブメントという、ヒッピーの若者が回心する霊的復興の中で、教会が成長しました。ヒッピーは、既成の体制を拒んで、自分たちで平和と愛を求めていた子たちです。しかし、キリストにある愛で、教会の人々は彼らを受け入れたのです。そこには、かなり葛藤がありました。しかし、では、カルバリーチャペルは、古い世代が若者に取って替ったのでしょうか？いいえ。ラブ・ソングという賛美グループがいました。彼らの歌に、こんな歌詞があります。<sup>1</sup>

長い髪、短い髪、  
スーツにネクタイ姿の人もいて  
ついに、みんなが、長髪の周りを取り囲んでも  
髪のことなど、目もくれず  
その人の、瞳だけを、見つめていた

---

<sup>1</sup> <https://youtu.be/kPLFhqHXwww>

若い世代だけでなく、古い世代もいて、古い世代の人たちと共に若い世代が歌っているのです。イエス・キリストは、昔も今も、これからも同じなのです。

<sup>9</sup> 様々な異なった教えによって迷わされてはいけません。食物の規定によらず、恵みによって心を強くするのは良いことです。食物の規定にしたがって歩んでいる者たちは、益を得ませんでした。

ユダヤ人の信者にとって、食物規定を守ることは、ごく自然のことであり、自分たちには親和性のある教えです。今のイスラエルに行っても、コシェルと呼ばれる食物規定が徹底しているので、その中で暮らしていくことができます。当時も、ユダヤ人であれば、キリストを信じる者であっても、食物規定は守っていたことでしょう。

しかし、著者はここで、「様々な異なった教えによって」と言っています。何が異なっていたのか？それは、食物規定によって、神の前に清められているという教えを、キリストの教えに混ぜ合わせて教えていたことです。習慣として、また、ユダヤ人の間に住んでキリストを伝えるという宣教の手段として食物規定を守るのではなく、霊的な、清めの手段として語っていたところが、恵みの福音から離れて、異質にさせていたのです。レビ記 11 章に代表される食物規定は、あくまでも、主ご自身が来るまでの影でした。この方が来られて、その流された血によって、私たちの罪は取り除かれました。そして聖なる者とされたのです。そのキリストを信じているのに、食物規定を守ることによって、清めを達成できると信じるなら、キリストの働きを真っ向から否定することになります。

それで、「食物の規定にしたがって歩んでいる者たちは、益を得ませんでした。」と言っています。何か、一見、霊的な活動のように見えるのでしょうか。けれども、結局、益にならないことが明らかです。異なる教えの問題は、必ず実が結ばれないことです。見た目は、その時は、良いもののように見えます。それで、多くの人が飛びつきます。けれども、イエス様が、偽教師とそうでないのを見分けるのは、実によってであることを教えられたように、実を見れば明らかです。

そして、「恵みによって心を強くするのは良いことです」と言っていますね。神の恵みによって、私たちは強められます。どんないろいろな方法によっても、私たちは強められません。神がキリストにあって一方的にしてくださったことによって、その恵みによって強められるのです。

## 2B キリスト者の祭壇 10-16

そこで、彼らが、何のささげ物を献げなければならないのかを、次に教えます。これまでのヘブル書のまとめのような内容です。キリストの告白を退けて、ユダヤ教の神殿礼拝の中に埋没してこうとしていた人々に、著者は、勇気を出して、キリストがご自身を献げられたところに留まろうと励まします。

### 1C 門の外 10-12

<sup>10</sup> 私たちには一つの祭壇があります。幕屋で仕えている者たちには、この祭壇から食べる権利がありません。

幕屋で仕えている者たちが、食べる権利がなく、私たちには食べる権利のある祭壇とは、何でしょうか？それは、キリストご自身であり、十字架につけられたキリストです。ユダヤ人信者たちは、神殿礼拝に埋没しようとしていましたが、そこにはあずかることのできない食物があるのです。十字架につけられたキリストご自身です。もちろん、霊的に話しています。主は、「ヨハネ 6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。」と言われました。ここにこそ、キリスト者がキリスト者として生き、また教会として集まる意味、意義があります。聖餐式は、それを最もよく体现している儀式です。

<sup>11</sup> 動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。<sup>12</sup> それでイエスも、ご自身の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。

午前礼拝で、このところを詳しくお話しました。罪のきよめのささげ物は、血は聖所に携えていきますが、からだは祭壇で焼かず、宿営の外の灰捨て場でやきます。大祭司は、年に一度、宥めの日にも、自分と家族のために、罪のきよめのささげ物を献げます。それから、民のためのいけにえも献げます。そのようにして、民の聖めを行うのですが、キリストがただ一度、ご自身の血を、まことの聖所、天の御座のところに携えて、永遠の聖めを成し遂げてくださいました。

そして今はここで、ご自身のからだについて語られているのです。罪のきよめのささげ物が、宿営の外で焼かれたように、主ご自身のからだは、エルサレムの都の門の外に連れて行かれて、ゴルゴダの処刑場で十字架につけられました。私は聖地旅行で、聖墳墓教会に行く時に、どこまでが当時の城壁内で、どこから城壁外になるのか、想像しながら歩いています。今は、何の印もないので分からないからです。

### 2C 来るべき都 13-14

<sup>13</sup> ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。

この宿営は、ユダヤ人共同体のことです。ユダヤ教を中心にしたユダヤ人たらしめる仲間のことです。彼らから仲間外れにされて、辱めを受けても、それはイエスの辱めを身に背負うことなのだから、誇るべきことなのだという事です。そうすることで、初めて神のみもとに行けるのだということです。私たちは、肉の家族やそのしきたりがありますが、そこから出て行って、それでみまえに



来ているのです。そして、霊の家族に属するようになっているのです。

<sup>14</sup> 私たちは、いつまでも続く都をこの地上に持っているのではなく、むしろ来たるべき都を求めているのです。

11章と12章で、著者がじっくりと話した、天にある都、天のシオンのことです。アブラハム、イサク、ヤコブの族長は、約束の地に入ったけれども、そこで所有せず死にました。しかし、彼らは、カナンの地はさることながら、本質的には、天にある都を求めていて、そこを故郷としていたのです。そして、私たち信者が近づいているのは、シオンの山で、天のシオンであると、著者は教えていました。それに基づいて、今の地上のエルサレムではなく、来るべき都を求めていると言っています。

私たちが、この世のものに戻ってってしまう理由は何でしょうか？私がここで話している、「この世」とは、必ずしも悪いものではありません。自分の仕事だったり、家庭だったり、趣味かもしれません。それら自体は何ら悪いものはありません。けれども、キリストを告白すると、その告白に従って自分の生き方を変えようとする、それらのものに人間的には支障が出てくるのです。それで、思い煩って、キリストに対してまっすぐに生けなくなっていくます。

そこで忘れてはいけないのは、この地上に自分の居場所があるのではないのだ、ということです。キリストにあって生きるというのは、居場所が天にしかないのに、この地上に生きるということです。だから、いつまでたっても、ここでは居心地が悪いのです。けれども、それが正常であり、健全なのです。私たちは、天にある都を求めています。

### 3B 神の喜ばれるいけにえ 17-18

そこで、地上における神殿のいけにえではなく、私たち教会が献げるべき、いけにえを勧めます。

<sup>15</sup> それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。

これは、ヘブル語において、果実と賛美は同じ言葉がから出ています。<sup>2</sup>私たちは、実を結ばせるために、賛美をうたいましょと勧めているのです。これが、神に献げるいけにえ、供え物です。

キリストが来られた今、私たちが献げることのできるいけにえは、神がキリストにあって行われたことに感謝することです。祈りにしても、献金にしても、この方に何かをしてもらうために、自分たちが誓いを立てたり、献げたりするものではありません。すべて、神が憐れんで私たちのためになしてくださったことで、神は事足りるのです。神が私たちに願われているのは、その賜物を受け入れる

---

<sup>2</sup> 「ヘブライの宝もの」ランデルマン真樹著 いのちのことば社 314頁

ことです。そして、受け入れた結果として、応答として、感謝が心から湧き出て、賛美が湧き出ます。<sup>16</sup> 善を行うことと、分かち合うことを忘れてはいけません。そのようないけにえを、神は喜ばれるのです。

もう一つのいけにえは、善を行うことです。分かち合うことです。預言者たちも、多くのいけにえを献げても、それを主が喜ばず、かえって忌み嫌うことも語りました。「イザ 1:17 善をなすことを習い、公正を求め、虐げる者を正し、みなしごを正しくさばき、やもめを弁護せよ。」主が、私たちに良くしてくださいました。その献身と犠牲の愛に応答して、私たちが良きわざに富むことを、主はいけにえとして喜ばれます。パウロがガラテヤ人にこう言いました。「6:9-10 失望せずに善を行いましょ。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります。ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょ。」

### **3A 整えのための祈り 17-25**

#### **1B 指導者への服従 17-19**

そして改めて、指導者たちを認めていくことについて、著者は語ります。

<sup>17</sup> あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人たちは神に申し開きをする者として、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にはならないからです。

7 節にある、「神のことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、覚えていなさい。」というのは、かつての指導者たちであったことを、伺わせます。今はみことばを話しておらず、けれども、過去に話していました。彼らを覚えていなさい、ということです。神のみことばを教え、恵みを教えていました。ここでは、たった今、彼らを指導している人々のことを話しているようです。「あなたがたの指導者たちの言うことを聞き」と言っています。主にあって、任命された人々を、彼らはないがしろにしていたのかもしれませんが。それで、服従しなさいと勧めているのでしょう。私たちはとかく、主にあって先代の指導者の信仰を継承した人たちのことを、軽視してしまいます。けれども、実際は、しっかりと先代から信仰を継承していて、私たちは新しく立てられている、神からの人々として受け入れるべきなのです。

「この人たちは神に申し開きをする者」とあります。自分自身が、任された人々について、神の前で申し開きしなければいけません。主のしもべとして、忠実であったかどうかの評価を、終わりの日にいただくのです。そして、「あなたがたのたましいのために見張りをしている」とありますね。一人一人の魂が、主の前に導かれているか、育てられているか、守られているか、そういったことを見ている人々です。そして、「見張っている」とありますと、監視のように見えますがそうではありません

ません。警官のように、あるいは牢屋の看守のように見張っているのではありません。羊飼いのよう  
に見張っているのです。つまり、敵が来るか来ないか見張っています。きちんと、自分が緑のあ  
る所に連れて行き、草を食べさせていることができるかを見張っています。体に傷がないどうか  
を、見張っています。

「この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。」とあります。  
指導者の言っていることに従っている時に、それは別に、言われたから仕方がなく、自分の意志に  
反して従っているのではないですね。指導者はこうこうしているけれども、確かに、自分も主に  
そのように示されているから、喜んで従います、ということだと思います。細かい指示で、自分と思  
っていたり、感じていることで異なることがあっても、向いている方向は同じだから、これは主の導  
きだと分かります。

けれども、反抗している人々に対して戒めを与えることは、これは嘆きによって行わなければな  
らないのです。だれも、従わない人に戒めを与えることを喜びとしません。しかし、しなければいけ  
ない時は行います。その時は、自分の益にならず、交わりから出ていかなければいけないことが  
あるのです。

<sup>18</sup> 私たちのために祈ってください。私たちは正しい良心を持っていると確信しており、何事について  
も正しく行動したいと思っているからです。<sup>19</sup> 私があなたがたのもとに早く戻れるように、なおいっ  
そう祈ってくださるよう、お願いします。

著者は、まさに教会の指導者として、主の前に申し開きをしなければならないことを意識してい  
ます。それで、「正しい良心を持っていると確信しており、何事についても正しく行動したいと思っ  
ている」と言っています。宣教の働きの中で、何かといろいろ、良心が試されることがあります。これ  
は、果たして正しいことなのかどうか？しかし、そこで心が清められていることが大事です。その中  
で、正しい行動を取ることができます。

そして、このことを、手紙を読んでいる人々に、祈ってほしいと願っていますね。正しく行動でき  
るようにすることと、彼らのところに早く戻れるにすることを祈りの課題に挙げています。パウロは、  
他の手紙でも祈ってほしいと強く懇願しています。今日も、週報に私のための祈りの課題を挙げま  
したね。ぜひ、祈ってください。皆さんの祈りによって、福音の働きは進みます。

## 2B 羊の大牧者 20-21

<sup>20</sup> 永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを、死者の中から導き出された平和の神  
が、<sup>21</sup> あらゆる良いものをもって、あなたがたを整え、みこころを行わせてくださいますように。また、  
御前でみこころにかなうことを、イエス・キリストを通して、私たちのうちに行ってくださいますように。

栄光が世々限りなくイエス・キリストにありますように。アーメン。

19 節の指導者は、彼ら自身に牧者がいます。大牧者、主イエスです。ペテロは、牧者たちに勧めを行っていますが、主イエスを大牧者と呼んでいます。「I ペテ 5:3-4 割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠をいただくことになります。」指導者は、自分自身が大牧者であるイエスに従いながら、任されている人々を指導します。ですから、自分が支配するのではなく、群れの模範となるのです。

そして、ここ 20 節は頌栄となっていますね。賛美であり、かつ祈りです。まず、主イエスを「永遠の契約の血による」大牧者であると言っています。私たちは、ずっとこのことを学んできました。主が流してくださった血によって、新しい契約が結ばれました。そして、その血によって、永遠の救いが成し遂げられました。次に、「死者の中から導き出された平和の神」と言っています。イエスを死者の中からよみがえらせた方です。この方が「平和」の神です。私たちを、主イエスにあって平和で支配し、私たちが平和の実を結ぶことを願われています。

二つのことを願っています。「あらゆる良いものをもって、あなたがたを整え、みこころを行わせてくださいますように。」ということです。指導者のことを、著者が強調しているのは、整えられてほしいということです。建物の修繕であるとか、壊れたところを建て直すような意味合いがあります。エペソ 4 章には、牧師また教師は、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためです。」とあります。私たちが、あらゆる良いもの、つまり神から来る賜物で満たされて、整えられるように、ということです。そして、初めてみこころを行うことができます。

そしてもう一つは、「御前でみこころにかなうことを、イエス・キリストを通して、私たちのうちに行ってくださいますように。」先に、みこころを行わせてくださいますように、と祈りました。けれども、ここでは、みこころにかなうことを、平和の神が行ってくださいますように、ということです。これは、私たちが、神に従順になっている時に、神ご自身が事を行ってくださいますことを示しています。「ピリ 2:13 神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださる方です。」私たちが志すことも、実は神がその志を与えてくださっています。そして、私たちが神に従順であることによって、神がそれを行わせてくださるのです。

そこで、栄光を主に帰しているんですね。「栄光が世々限りなくイエス・キリストにありますように。アーメン。」とあります。

### 3B 勧めのことば 22-25

それでは、最後のことば、挨拶の言葉に入ります。

<sup>22</sup> 兄弟たちよ、あなたがたにお願いします。このような勧めのことばを耐え忍んでください。私は手短に書いたのです。

著者は、この手紙のことばが、彼らが耐え忍ばなければいけない内容のものだと、分かっていたようです。かなり多くの警告の言葉が書いてありました。勧めの言葉は、時に辛くなる、悲しくなるかもしれません。主の訓練を耐え忍ぶことも教えていましたね。

そして、手短に書いたと言っています。これは驚きです。でも、著者にとっては、もっともと言いたいことがあったのでしょうが、短くしているのを、所々で感じました。メクキゼデクについて、言いたいことがたくさんあるけれども、心が鈍くなっていて語るができないとか。また、幕屋の説明で、いちいち語っていくことができないとか、また、信仰の証しについて、あまりにもたくさんいるので、後半の人々は名前を列挙して、まとめて語っているとか、いろいろありました。いろんな意味で、省略してしまっているのです。耐え忍んでくださいと言っているのかもしれませんが。勧めが聞くのに悲しむかもしれないという意味もあり、そして、手短なので、きちんと説明しきれていない部分は耐え忍んでください、と言っているのかもしれませんが。

<sup>23</sup> 私たちの兄弟テモテが釈放されたことを、お知らせします。もし彼が早く来れば、私は彼と一緒にあなたがたに会えるでしょう。

テモテが出てきました。ここから、私はどうしても、著者がパウロではないかと思ってしまう。パウロが牢に入れられて、テモテが共にいるということは彼の手紙の中にありましたが、ここでは逆ですね。テモテが牢にいて、著者はいませんでした。けれども、彼が釈放されました。それで、いっしょに彼らのところに行けるかもしれないと言っています。

<sup>24</sup> あなたがたのすべての指導者たち、また、すべての聖徒たちによろしく。イタリアから来た人たちが、あなたがたによろしくと言っています。

13 章で見えてきたように、指導者たちに従っておらず、勝手に集まることをやめている人々がいる中で、指導者たちに従いなさいという内容を書いたわけですが、まずその指導者たちへの挨拶です。そして、聖徒たちです。

さらに、イタリアから来た人々のあいさつがあります。著者は、ローマにいらっしゃるのでしょうか、イタリアの中、あるいはイタリアからさほど遠くないところにいます。

<sup>25</sup> 恵みがあなたがたすべてとともにありますように。

使徒たちの手紙の締めくくりの多くが、恵みが共にあるように、であります。恵みの中に留まって

いてほしいというのが、ヘブル人への手紙にある、著者の情熱でした。私たちにも、主は、恵みに留まって、その中で強められてほしいと願われています。私たちと共に、ありますように。

次の書は、ヤコブの手紙です。ヤコブも、実はユダヤ人に対して宛てられた手紙であり、テーマが、霊的な成熟であります。ヘブル人への手紙と同じです。しかし、もっと具体的で、実際的なことを書いている知恵の書です。